

紀州漆器の町・黒江(海南市)

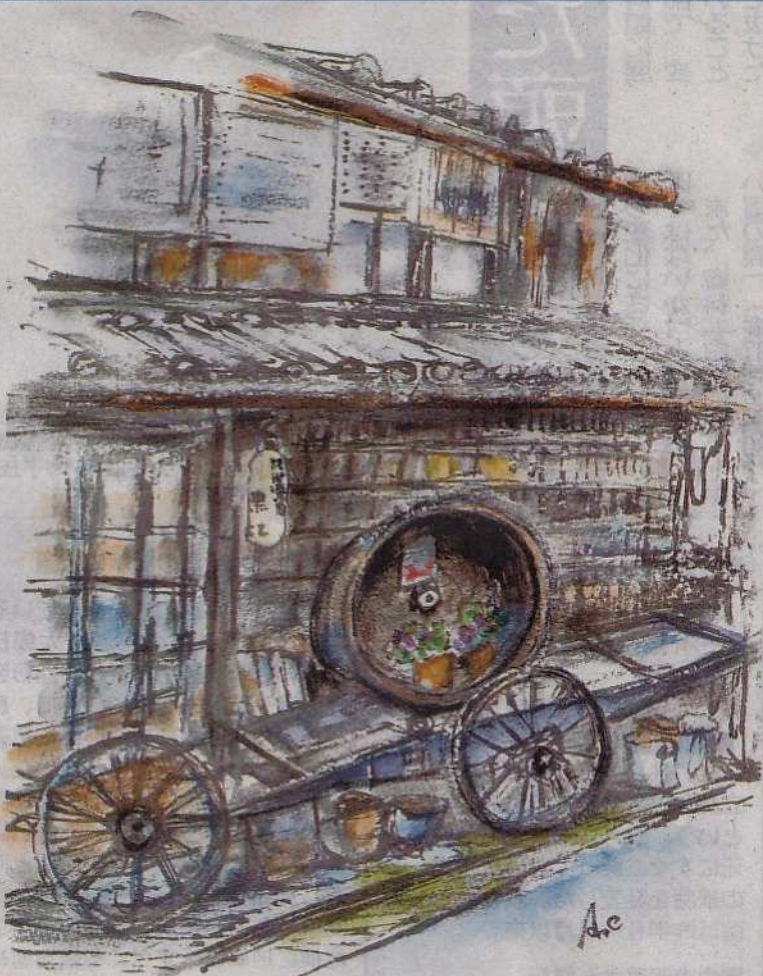
絵と文・熱田親憲 題字・熱田秦華

熊野古道

みちのくまの記

39

観光地図を追って紀州街道を南下していく。紀州漆器伝統産業会と、漆器の町・黒江海館(うるわし館)を訪(南市)に地理的意外性を感じた。漆は英語でJapan。学生時代知って既に意外性を感じていたのだが...



路地にある漆器店(海南市黒江の川端通りにて)

根来塗「わび・さび」のいろいろ

が目に留まった。近く、江(滋賀県)の人たちが旧黒江公民館のイベントは、女性客でにぎわっていた。ガイドさんや漆器問屋の女主人もおられ、「なぜ当地で漆器産業が盛んになったのですか」と尋ねた。室町〜戦国時代、近江(滋賀県)の人たちが熊野詣での帰り道、当地はヒノキなどの木材が豊富で、気候も温暖で住みやすいことを知り、室町から戦国時代にかけて木地師が大勢移住。紀州街道が「イスカパー紀州」の場塗り(柿渋に松煙または炭粉を混ぜ塗りし、

下地が完成。その後、中塗り、上塗りして椀づくりが完成。後に指し物、箱をも手掛け、「黒江塗」の基礎ができたようだ。その後、漆の原料が枯渇し、1959(昭和34)年ごろから、樹脂による成素地に化学塗料で塗装した新製品が開発され、手ごろなものが多種目出回るようになって今に至っている。江戸時代の発展の中心は今の川端通りで、当時は川だった。周りに漆器問屋と宿屋が並び、売りの反物を持ち込んだ伊予の商人

漆桶すみの鉢のとり囲み 秦華